

マルクスは二度の研究の上に自分の結論を基礎づけた

カウツキーはこたえる。このような「証拠」は事実のすりかえに等しい、なぜなら、『〔経済学〕批判』が（ロシア語訳『経済学の若干の命題の批判』をみよ）の序文のなかでマルクスが正確に示しているように、マルクスは、一つでなしに二つの研究のうえに自分の結論を基礎づけているからである。第一の研究は、マルクスが『ライン新聞』の編集局を出たのち、四〇年代になされた。マルクスが編集局から出たのは、彼が物質的利害を論じなければならない破目になったのに、そうするだけの準備がないことを自覚したからである。マルクスは自分自身について書いている。私は、公けの舞台から書齋にしりぞいた、と。このように（とカウツキーは、ベルンシュタインにあてつけながら、強調している）マルクスは、物質的利害にかんする自分の判断の正しさ、この問題についてその当時に支配していた見解の正しさを疑いながらも、自分の疑いを、それについてまとまった書物を書き、その疑いを相手えらばずに披露するほど、重要なものとは考えなかった。いな、マルクスは、従前の見解にたいする疑いからなにかの積極的な新しい見解へうつるために、勉強にとりかかったのである。彼はフランスの社会学説とイギリスの経済学を研究しはじめた。彼は、その当時イギリスの国民経済の実状をくわしく研究していたエンゲルスに接近した。この共同の仕事、この**最初**の研究の成果は、周知のとおり結論であって、それをこの二人の著作家は、四〇年代の末に十分に明確に叙述したのである。一八五〇年ごろマルクスはロンドンにうつり住んだが、学問上の仕事にとって好都合なロンドンの生活条件は、彼を刺激して、「はじめからまったくやりなおし、新しい材料を批判的にすっかり研究しようと決心させた」（『若干の命題の批判』、第一版、序文11ページ〔補巻3、六ページ〕傍点――筆者）。長い年月にわたったこの**第二**の研究の成果は、二つの著作、『批判』（1859年）と『資本論』（1867年）とであった。『資本論』の到達した結論が以前の四〇年代の結論に一致しているのは、第二の研究が第一の研究の結果を裏書きしたからである。「私の見解は、人がそれをどう判断しようとも、……長年にわたる良心的な研究の成果である」と、マルクスは1859年に書いている（前掲書、序文一二ページ〔六ページ〕）。はたしてこれが、研究そのものよりもずっとまえからできあがっていた結論らしくみえるであろうか、とカウツキーは質問している。

第四巻 カウツキー『ベルンシュタインと社会民主党の綱領』の書評P208 209
1899年末執筆

コメント

マルクスは最初の研究で観念論を精算し、唯物史観に到達した。二度目の研究では唯物史観を導きの糸として資本主義に全面的で本格的な研究に取り組み、史的唯物論を裏書きした。だから、マルクスが自分のドグマにあわせて理論を作りあげたというベルンシュタインの批判は当たらない。私たちマルクス・レーニン主義者は唯物論者であり、現実のリアルな分析を通じて社会の変革を考え、行動することを自己の任務としている。